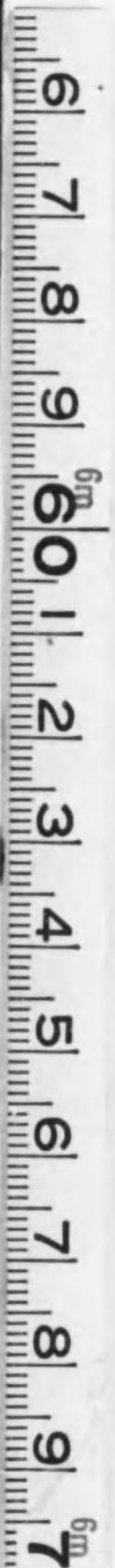


高山先生  
寛政元年江戸日記

特 253 /

493



始



特 25  
40





樂老稱寬政  
三奇士通曉  
本朝典故闡  
明王霸者  
者吾推蒲生  
靜修達觀

宇內趨勢輕  
輪中外推宜  
者吾推林  
若夫不復成教  
百年  
利  
柳塞之正氣  
啓成維

中興之皇運  
魁首莫如  
高山仰繩也  
矣古之所謂  
邦家以一人  
興者其在斯

人歎

昭和戊辰秋

火國台学書院



### 本書刊行の由來

此一巻は高山正之先生四十三歳の時即ち寛政元年、江戸滞在中の日記の殘編で十一月末日の後半より翌十二月晦日に至るまでを誌したものである。

本書の原本、即ち高山先生自筆の日記は半紙四折の横綴帳で、往年武藏の儒醫本庄備篤といへる人が、筑後久留米藩の儒員佐田修平氏に贈られた物であることは、同書の裏表紙に

高山正之江戸日記殘編、秘藏囊底、感舊交竹水先生爲人、而割愛贈之、聊報知己之情、

武州本庄 著一 本庄備篤

と自署してあるので明かである。表紙に、寛政元年己酉高山彦九郎江戸日記と書したのも、亦同人の自筆である。

本庄備篤は武州本庄町の人で、正俊の二男である。夙に長崎に出でて蘭法醫を學び、眼科に通じて眼科銀囊の著などもある。弘化三年十一月歿した。

佐田修平は久留米の人で、諱は直道竹水と號した。初め藩儒樟嶋石梁に學び、後江戸に遊んで昌平黌に入り、博く經史を研究し、業成つて藩侯の侍讀と爲つた。性遊歴を好んで、廣く山河を跋涉したが、曾て蝦夷に到り松前侯に謁して蝦夷錦を賜つた、歸途頼山陽を訪うて之を示したら

山陽は蝦夷錦といふ古詩一篇を作つて贈つた。かくて竹水は慶應元年三月、六十八歳で病歿した。彼の征韓論の首唱者として有名な佐田白茅は其長男である。竹水は詩に巧であつたので、佳篇の世に傳ふべきものも多い。それで大正十三年六月、我筑後史談會は其詩を輯め竹水遺稿と題して之を出版した。

其後、同書は久留米藩の國老稻次正訓氏の有と爲つたが明治二十八九年の交、故あつて肥後熊本の詩人山田天山氏の手に歸して居たのを今より十數年前に、久留米の酒井唯三郎氏が之を購ひ得たのであるが、唯三郎氏は即ち現所有者酒井龍太郎氏の伯父で既に故人である。

酒井氏は醫を業として書畫を愛玩し、又作詩の嗜みある人であるが、獨り此書を篋底に秘藏するに忍びないで史學に志があつて閲讀を請ふ者には喜んで之を觀せて居られた。大正十五年十月、久邇宮邦彦王殿下が、將官演習御見學の爲、久留米に御成遊されて倉田泰藏氏邸に御滯泊中には、兩日間御臺覽を賜つた事もある。其後永井潜、徳富蘇峰先生達が、寺町遍照院内なる高山朝臣の墓を弔せられた際にも、本會幹事が之を借りて閲覽に供したこともあつた。

斯かる珍本は、是非とも本會で出版して世に公にした

いと考へながら、印刷費の出處が無いため實現することが出来なかつたが、今回圖らずも我久留米市の大工業家である「つちや」足袋合名會社々長倉田泰藏氏の義侠によつて、年來の希望が達成せられる様になつたのは洵に喜ばしいことである。

抑も倉田氏の一家は、初代雲平氏以來熱心なる佛教信者で、又皇室中心主義を奉じて忠孝の志堅く、家族を始め社員職工に至るまで、我國粹の美德を修養せしむることに力を盡して、機會ある毎に報徳會、乃木會其他の修養團體や宗教團體の名士學者を聘して講話會を催し、又外に向つても種々の社會奉仕事業に貢献せられたことも少くはない。

然るに同氏は、此度御大禮奉祝記念の爲、酒井氏の同意を得て、多額の義金を捐て、本書數百部を出版し、之を貴顯、摺神及び官立學校、圖書館等に寄贈して、思想善導、歴史研究の資料に供したいとの考で、其印刷配布等一切の事を我筑後史談會に委囑せられた。

本會は氏の篤志に感激して、成るべく完全なる書冊として之を刊行することに決し、先づ全文を原本の通りコロタイプ版となし、次に光輝ある序文を以て冒頭を飾り

又福岡縣立圖書館長伊東尾四郎氏の筆に成れる内容解説書を添へ、終尾には全文を楷書に改めたるものを活版として附載することにしたが、是は武藤幹事専ら其事に當つた。

茲に本書出版の由來を叙して、酒井氏が秘藏本を公刊する事を快諾せられた厚意と、倉田氏が精神的奉仕事業に鉅費を擲られた美譽とを江湖に紹介する所以である。

昭和三年十一月大嘗祭日

筑後史談會

とそは終る為雅の事  
其行乃加らるゆゑの事  
家々世々ある世の名を後  
とるんもわを事ありて  
後雅の白し後とて送る  
とまれしとまれとまら  
名雅の利根川の事あり  
とまをよまの事ありと  
わらん利根の川流あり  
とらる  
とらるるて歳んかあり  
まはるるしとらるるあり  
とらるとらるるあり

南土乃 後子んしとよあは  
 こらりんししたちと縁のち  
 と縁下しくくはきさ  
 築女しから二十回り来し  
 馬より二十すいりか細き舟し  
 舟よりして二十七ちあまきかして  
 舟りたのりしきさつらとぬ  
 因らふふたあとも ~~見~~  
 たらふみあさるやろしき ~~見~~  
 舟りと築女しきさつらと縁の  
 取以北は根よはととて舟を  
 とけりあまのちとて舟を  
 とて舟を舟しゆらうしゆらうし  
 たらふみあさるして ~~見~~  
~~見~~

因のりし後子とよあは  
 あはれと云らるは縁  
 舟りと築女しきさつらと縁の  
 伊のりたと縁のち ~~見~~  
 舟り人子細き舟りた  
 縁得と縁 ~~見~~ 代縁と  
 義介行舟しこれと縁  
 たる伴りえうはらふは縁  
 縁のりたのりたと縁のち  
 しよらうしゆらうしゆらうし  
 たらふみあさるして ~~見~~  
 たらふみあさるして ~~見~~



十二月朔日壬子性賦

おまふはあまのたにけりけり言  
乃い少情之身本も多難也  
才少し大に弱む西字の身なり  
とまふ醉れまじくあれ正之  
不問れめりれ、如にほれ  
いしけり流るるるるるる  
世に情けれ

門

名雅

少もかきめりるるるる  
生るるるれ竹れりりりり  
世のふ代のま

酔乃にいさそお奇りえ  
ちる時の身 達

重乃乃くはれりりり  
友か死に酌はりりり  
年々年色自年也  
原居福れりりりりり  
少奇乃りまらりりりり  
西し奇めいれりりり  
千代 ぬらりりりりり  
世ま 友はれりりり  
たのぬらりりりりり

らむし

名雅

くもむのそしたらへぬ  
まゝのまゝにあつたうら  
るものあともまゝし  
刀根の川ききにあら  
せし情をいかりいぢ  
らめれ

名雅

上げほそめゆしねめ  
かゝるさめゆしねめ  
はうつて此句とみし

二日晴るる他をいれ

望み、あん初月よあま  
か林懐し仰ふお潮とあま  
そのおあまのあましゆし  
老か君しおくれけりあ  
そのおあまのあましゆ  
るそしゆら、望みあま  
たろりてあまあまら  
あまら、おまらあまら  
あまら、あまらあまら  
おまらあまらあまら

三日月甲寅土用商吉刻  
 三日月甲寅土用商吉刻

三日月甲寅土用商吉刻  
 三日月甲寅土用商吉刻

三日月甲寅土用商吉刻  
 三日月甲寅土用商吉刻





有栖川親王の偏執の由を  
うし<sup>第</sup> <sup>一</sup>と云ふに <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
田代帥の宮と侍者も能  
あつて <sup>内</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
桃園院前御の侍時白  
源 <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
音 <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
君 <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
と <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
り <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
の <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
別 <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>  
が <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup> <sup>一</sup>

とありけりまづくの中を  
上の侍者も久しに侍り侍  
るに隆治も之を侍るに  
自云平中卿は侍るに久し  
か人云平中卿は侍るに久し  
か他者を侍るに久し侍る  
に久し

七日多摩河原前中宮の御  
まじり侍り侍るに久し侍る  
に久し侍るに久し侍るに  
久し



九日午申一休時爲美  
家うとに。物老くもあはし  
りて。居るとも。いふと。ト。し。を。  
申。作。下。人。な。れ。ら。す。百。第。の  
眼。行。く。と。う。と。い。ま。ま。を。居。ん。の。  
は。ら。ら。上。り。地。と。山。ふ。あ。れ。の。  
形。く。た。た。り。さ。し。り。り。あ。り。下。  
中。り。名。ノ。ち。の。あ。り。大。川。の。  
向。く。と。す。て。あ。り。の。さ。あ。り。た。  
う。は。あ。つ。を。し。と。島。と。境。  
義。介。竹。高。の。ゆ。ら。の。舟。と。盛。  
し。て。写。し。る。事。に。け。ら。土。佐。産

の。能。一。書。之。入。部。の。始。の。一。敷  
目。ら。ら。丸。名。屋。寺。の。集。り  
從。服。せ。ん。あ。り。け。ら。仁。井。田  
く。い。ら。あ。り。て。あ。り。て。從。  
う。く。今。生。と。あ。り。て。從。服。ん  
毎。年。中。一。日。月。十。日。了。る。乃  
今。お。知。る。新。地。下。の。形。く。  
あ。り。と。名。ノ。目。ら。の。理。り。て。時。に。  
ま。は。あ。り。り。と。を。け。ら。大。  
う。て。そ。る。新。地。下。を。し。と。あ。  
海。を。し。と。い。は。れ。の。さ。あ。り。  
け。ら。大。の。字。し。と。あ。り。



わらう山ごう花のまると  
 了りて一山同のれ、望  
 とろん洋えん流るハ新地  
 地中夜のちたうあさく  
 昔る平井はくあそび  
 にくらあんのほのほ  
 平井のあんこりるのり  
 他その片見かそふ  
 財義ふのまへんをそ又  
 あし録野矢しまは  
 たしんるまのた  
 らし一終ふそや也、ゆり

南原一片と区弁せり  
 元徳某氏分地并時喜作  
 たり形あらうい路りゆり  
 市中央のちる南原は其の表  
 市の表と遊、たりとる  
 徳生の説とふう人恒家  
 正新くぬるうとそんしと  
 伴りて終る

十日暇、何事弘みそ  
 持世の、(原)子早命家春  
 成徳の、(原)子早命家春

山に伸くを川の内川有し先降  
 下入る。予はあまると然らざらん  
 梅を花と浮け床の飾とわら  
 伏見製玉の法用製し  
 玉のつる玉に花とつる玉  
 玉のなま度の書ふれし奇を  
 玉とゆゆあれんつたて物し  
 濁河とあましは向ぬ物者  
 物とあましせよを降十八年  
 物とあまし十七りあまあま  
 常如行見あ町ふあまのし  
 人こけるとあまあつれつ波に  
 又まふが牛中とあまあて  
 物とあまふの書とあま

其のしとあまああ感ゆに降  
 降奇とあまあまあああ  
 降あまあああああああ  
 降あまあああああああ  
 降あまあああああああ  
 降あまあああああああ

降あまあああああああ  
 降あまあああああああ  
 降あまあああああああ  
 降あまあああああああ  
 降あまあああああああ  
 降あまあああああああ

むらゝしあふゝし人如  
とふんはる多詩と理  
星狀信 与山牛生  
河川 命名賦  
偶行道人 家面  
子律 世間  
疎多日之梅 花似  
十 ① 蒼耳 二期 二月  
多 其 具 性 於 未 史 均  
治 日 狩 針 方 蘇 山 女

多 年 十 八 年 心 志 志 律 志  
と 妹 志 志 志 志 志 志 志  
竹 志 志 志 志 志 志 志  
山 田 志 志 志 志 志 志 志  
邦 輔 親 王 志 志 志 志  
夢 志 志 志 志 志 志 志  
志 志 志 志 志 志 志  
乃 志 志 志 志 志 志 志  
乃 志 志 志 志 志 志 志

かのうありては所擧げらる  
 親の手。ありても所子と  
 長女を玉のしよめ四人と  
 出づ。また母のささき。服を  
 して一人にして。可也の由事  
 流るるをくや。蛙の奇姿  
 石ころあり。おれのおれも  
 とも。書り玉の。け  
 世に。遊るおれの親。玉と  
 あゝ。若さを。け。を  
 危文にて。市に。ゆ。り  
 あり

十一日 此より 伴又正 穂子君

昔は。昔は。現に。女  
 周りに。おれ。改行。おれ  
 年七五。おれ。おれ。おれ  
 ら。おれ。おれ。おれ。おれ  
 ぬ。おれ。おれ。おれ。おれ  
 掃。おれ。おれ。おれ。おれ  
 十一日。おれ。おれ。おれ。おれ  
 おれ。おれ。おれ。おれ。おれ  
 おれ。おれ。おれ。おれ。おれ  
 おれ。おれ。おれ。おれ。おれ  
 おれ。おれ。おれ。おれ。おれ

河樹を請ふ他玉如生氏と  
言ふはつちかた出でて身はつた  
自ら平中卿平中卿といふ  
言ふはつちかた出でて身はつた  
能く行ふ事非ず時十の遠き  
方なき居代一ち向ふ方世  
行ふは頼貞頼貞といふは種  
の事なりつちかた出でて身はつた  
と上列をみず井田せりつちかた  
頼貞氏をその身はつたは頼貞氏の  
ち代中りの近十ちをみず  
和入部ありつちかた出でて身はつた

庄のりつちかた出でて身はつた  
或は白衣あるとあるて頼貞  
平中卿といふはつちかた出でて身はつた  
和入部ありつちかた出でて身はつた  
平中卿といふはつちかた出でて身はつた  
和入部ありつちかた出でて身はつた  
平中卿といふはつちかた出でて身はつた  
和入部ありつちかた出でて身はつた  
平中卿といふはつちかた出でて身はつた  
和入部ありつちかた出でて身はつた

同くはたりとて名を稱し  
伴信後より居る所新以所  
又の板を所したる若くは  
寺にありしめ寺を造り  
とて之れをあらはし都の寺に  
ありしとて之れを稱し  
聖武天皇自奉遵先帝  
遺詔日夜紹隆此寺  
遍降給命相又求良工  
時有稱沙門道慈者  
奏云 天皇曰道慈問

道來法自唐國來聖  
朝但有一宿念欲造  
大寺倫圖取西明寺  
結搆體 天皇聞而  
大悅以為我願滿也  
天平元年己巳更勅  
道慈改造此寺即以  
道慈補律師兼賜食  
封一百石 庶表賞有負  
不自大記之二七年間

營造既成 天皇歡  
悅開大法會施入三  
百町水田得度五百  
人之沙弥十七年乙  
酉改大官大寺以為  
大安寺詔曰今天下  
大平安樂之義也同  
國復有東大西大兩  
大寺故俗呼為南大  
寺焉外從五位下行

左大史兼春宮大屬  
壬生忌寸聖村去七  
月十七日倭併遣唐  
副使從五位上守右  
女弁兼行式部少輔  
文音博士讚岐介紀  
朝臣長谷雄傳宣中  
納言兼右近衛大將  
從三位行春宮大  
亮藤原朝臣時平

宣奉

勅宣洎令大

安寺一曰等勸申被寺  
建立代人緣起者仍  
令勘出從流記十二  
卷中准知弘仁義和  
八年之宣旨等例  
畧所注進如右

寬平七年八月五日

俗別當遣唐大使中  
納言從三位兼行左大

弁春宮

權左衛門

世人貴官公久矣雖民間  
之見女子尚知公之令名  
咸莫不稱天滿天神而  
敬信禮拜者也然當年  
記述隔視其書者稀  
也於是年得其隻字  
猶得拱壁至今茲予偶  
視大安寺緣起乃取  
其十之一以上梓蓋欲  
使眾人知公之書跡而



已寛政元年歲次己酉

夏五月 旭山赤長卿

右之石橋石橋之杉井田

奇人伊田主水皇明

奇々々々々々々々々々

海邊橋衣 皇明

わさ吹形こ乃然似也

やささささささささ

信誓乃信也

皇明高蒲

草の居の所のあぢ

乙日あぬささぬまこ

草の居の所のあぢ

老の心迷懐

老の心迷懐

我々の心迷懐

老の心迷懐

寄り物祝

掛るあておも苦方

世の心迷懐

世の心迷懐

山草

目尺草子然くさく草て  
しくくせし草やしほく  
草乃婦一の根

山草

行一

山一しうせまのよの  
草ふ草草のお草那  
山草しう白草草の草

山草

草の草草て草草の  
草七申く五日てく

草の草山

行一草草とく世草の  
草くく草草草草の  
くくくくくく草草草  
草草草草草草草草  
草草草草草草草草  
草草草草草草草草

草由草草草草草草の  
草草草草草草草草  
草草草草草草草草  
草草草草草草草草  
草草草草草草草草  
草草草草草草草草

門又ーたるさける●昔風  
者白らゆる向きて日下  
開山たるん予とさるいけ  
とツカ士とありつれと  
階級まをし目、本開山と  
予と何れの子と知りぬや  
又けしよと知るやある方  
のふとつるのふ昔一也  
初く下開りて世風と  
お兵つるのふ大兵ある  
昔風遠かかつてける  
昔一かや川いカカ士の先  
快く下とさるーと有る

川殿中うねり何川を、  
あれふらうとけいけい  
此凡と即ち白を金

十三日甲子夜睡者

有る夜の夢、  
とつぬをい、  
有る夜の夢、  
五ふ入つて  
礼辭とよぶ  
其方、  
幼中、

吟らりて吟物ゆ素直と物言  
花横に中よりふて歌はる  
記何なる為二部々たる  
自の力士とて此の世に  
世をさるるめはたのふ  
水津治るる自の力士と  
部々良知れ打らる物  
日下園山とて是れ  
さるる名なるもの  
自の力士とて此の世に  
有んたるをては中  
かたはる世の事なる  
かたはる世の事なる

つはゆらふとわき回るる  
名はたはるる

陸状

高叶久るる  
標列たる人

少野川

右とて度は  
高叶門  
仍ら陸状

實政  
十月  
本朝  
十九代孫



晩ふ及し下二十一日を過ぎ、  
會に於てと好くして出づ  
昔中ふ均るる夜時喜ぶに  
建、けりた葉集氏、新の  
流とて、片物をりりね下  
平たるといふ、平与を成り  
新まのありききありし  
ま、到まつりぬして是れ  
何れとて是れ

十四日晴る前坐控たき  
五島とて上らば即代

石名宗は左の内に石名  
葉香化新調所甲取れ  
るす芳たきを、  
此、自是外、名は、後  
中、地、在、山、外、地、に、  
た、の、一、女、後、に、  
打、と、あ、り、き、き、  
あ、る、多、く、あ、る、  
ゆ、が、く、と、あ、る、  
内、る、と、あ、る、  
小、兒、と、あ、る、  
ゆ、り、あ、る、と、あ、る、

ふかあかきり割を傳し傳す  
其利とて以て相違ひなく  
小児正長育月をとり甚な思  
用盡すありとて其利を  
信して餘を其利あらむ  
利とれ久しかりしと田地  
同しけり思と致しす  
ゆきし ~~目~~ 記  
出まはれ利申を以て徳を  
吹あしめとて申りたつ物  
利申あらむ新所西赤木  
下を伝申すはたきとて  
おきし門ありしとて申す

極事とてとて其利申上裂  
ゆきしとて、其利とて  
神作凡し節遠門とて  
山下とて、其利申上裂  
他玉大なる事とてけり  
下を伝申すはたきとて  
都三白とて其利申上裂  
其利とて、其利申上裂  
二子大とて他玉とて其利申上裂  
中西伝申すはたきとて神作  
上りありしとて其利申上裂





ケル娘らてお尋ねの事  
もど親つ奇年何き者と  
舞止りて神法居るは  
柏木とてして清くよく  
集おるの奇めと云ふ  
年何き者 一き年

名ぶちや年の日つちて  
いとよはらちちけり  
い

い

考同

あしあつちまかぬのほ  
年一といふはつちの

い

都師

い年の内ハまじりま  
け春と氣をまのうき  
おと天高なる山と  
おとそくしうくれ

考同

いれと又眼をたが  
入りおらちて西の  
又さるちちちちち  
天らうつくきよめ

くそく人しつ君と一有日を  
くそくはれとてのたつこ  
多しと上と新出物を  
多しと根をてして  
新出物とてのたつこ  
明れはるる欠つて  
日也入たふく  
て面白くあり  
多しと根をてして  
新出物とてのたつこ

新出物のたつこ  
日也入たふく  
て面白くあり  
多しと根をてして  
新出物とてのたつこ  
直ぐ自出たつこ

実し甚盛

難波の江乃堀江乃河  
乃而れ亦加進しく河  
あしハ名波の流見  
をまきと流し

十の白信賤前理老人  
袴と衣せたるより深く  
多の細く志しと神田  
をう上りたふ却た馬あ  
雲神し流酒とすく神  
幾年しと均ら焚酔ゆ

前理老人の妻せ持る妻  
病ふそくくくく  
寝け

十七日晴

此城と相ん中  
大の河と弱く  
山  
た  
何とあし  
名

奉命使節ありては  
はるかにあつたこと  
しほしほとあり

十八日 山崎に幸ふ

右山崎に幸ふに  
はるかにあつたこと  
しほしほとあり  
山崎に幸ふに  
はるかにあつたこと  
しほしほとあり

十九日 山崎に幸ふ

山崎に幸ふに  
はるかにあつたこと  
しほしほとあり  
山崎に幸ふに  
はるかにあつたこと  
しほしほとあり

るものや宛えしめりて  
傳ふ古よりして書かば  
傳ふ所の所をたす人  
今も来をいつくか  
西平石をたす  
能行書と  
石川  
御田  
後

新物づくし  
石老山  
書  
石川  
御田  
後

所を長き事取好劇あり  
と改めたるを父の初め  
懐平一佛除か時ありて  
又の信を修くんと改ら  
しつ又の信を修くんと改ら  
るの信を修くんと改ら  
と改らるる一物しり改ら  
あつたるるの信を修く  
信を修くとき改らるる  
と改らるるるるるる  
つるるる又の信を修く  
改らるるるるるるるる

味あふたるるるるる  
甚多しあるるるるる  
又の信を修くとき改ら  
正之及改らるるるる  
田平ハリと改らるる  
改らるるるるるるるる  
も改らるるるるるる  
寧平又信士と改らるる  
十月二十一日改らるる  
改らるるるるるるるる  
改らるるるるるるるる

何子より解し後京  
口へ入る後平を  
こころて而もあか  
とるは地土之に  
自是年申即ち  
何と云ふん  
と云ふる云と云ふ

十九日  
中務省御内  
而てん

為り  
今も  
先之  
玉  
海  
と云  
人  
車  
十  
事  
と云







二親ふも孝あるよもの  
人にてあつてハツとや  
あつたり見ると我  
身そと出たあちの  
ものりく九ツとや  
らり〜何そんよん  
り〜大さくならん  
めり〜十とやとあ  
〜けき〜えしたる世  
と〜や〜世に〜  
〜又〜上を名あふが  
〜し〜あつた人の

あつた〜い〜あつた  
民間の事と流るるを  
上を〜とさ〜  
〜と流るるあつた  
七つある国の事を上を  
海を〜あつたのあつた  
あつた〜し〜あつた  
あつた〜あつたのあつた  
あつた〜あつたのあつた  
あつた〜あつたのあつた  
あつた〜あつたのあつた  
あつた〜あつたのあつた







とん老人奇と云ん

とらる奇

清く水く波を倍と云  
知らる奇と云所と云  
とらる奇と云布と云  
山乃井と云水

と云と云と云の云と云  
申すの云と云と云

帝都と云と云と云  
と云と云と云と云  
けと云と云と云

と云

白の云と云と云

と云と云と云と云

仰く云と云と云

と云と云の云と云と云

と云と云の云と云と云

春と云と云と云と云

男が云と云と云と云

らと云と云と云と云

と云と云と云と云

と云と云と云と云

と云と云と云と云

~~...~~  
 ...  
 ...  
 ...

二十二日夕方西三馬路正月  
 節の先子のハ刺す  
 昭如て何れくくしたの  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

人定今くらす乃の事す  
とんといはる人定丸を  
けらぬ由教書法々  
とある人定丸一書法  
りりて根藉し  
之は病身け  
挿、られ入牢  
會神書と  
後り秋  
正典と  
高介  
院

三番  
久  
正典  
治  
も  
都  
日  
柄  
抱  
た  
出







二十五日晴々赤地老人

福壽のちのちの事りなき義ん

奇 福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

福壽のちのちの事りなき義ん

と信々様様と信々様

山々々の山々川川有義

五々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義

山々々の山々川川有義



返ししと器に流しきき  
唐の華にち終と行りて  
神田無名所より新基堂  
石のまうりていりし  
雲神と評し御所守  
二る相とゆいし  
たふりて食りたし  
中のまうりた物に  
灯たらしりし  
ゆいし  
新基堂の  
奇りし

二日まうりたは  
中らまうりた  
ふりけり

まうり

乃やしかおも  
まうりた  
こまうりた  
ねりし  
まうりた  
ゆいし

くさよひのふりまき

り 達

扱ふふふふふふふふ  
ふ様うたててけ  
ふふふふふふふ

門 瑛子

あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ

二十七日晴るあふふふ

あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ

次子

あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ  
あふふふふふふふ



形列平治の在古山長年  
名利 永春の伝加美  
卯申年正直 羽列山形伝  
結城伝七 武秀口伝  
正武士伝 本行久左中国屋  
与列今 張伝 芥友方伝  
因正直 阿列 石川少平 正守  
其子 分 伝 正直 上 左 而  
由武 越 以 幕 下 之 士 白 伝  
平 了 傳 山 龍 川 村 為 者  
為 者 先 者 上 列 格 以 記 中 伝  
初 系 之 秀 上 列 之 傳 中 伝  
地 也 申 年 正 美 傳 列 本 中 伝

佐少平 申 年 申 年 申 年 正 守 武 列  
神 白 之 伝 保 列 之 傳 中 伝  
正 列 之 列 八 王 子 宮 川  
宮 治 吉 國 相 列 宮 治 傳  
昔 氏 之 傳 之 傳 道 其 外  
由 傳 者 之 傳 之 傳 傳 傳 傳  
鱈 川 之 傳 之 傳 未 傳 之 傳  
新 中 年 榮 進 之 傳 之 傳  
定 堅 之 傳 之 傳 之 傳 之 傳  
英 紀 昌 直 之 傳 之 傳 之 傳  
之 傳 之 傳 之 傳 之 傳  
國 之 傳 之 傳 之 傳 之 傳



予の~~書~~仙の事と書す  
正安の年凡行して云く  
因恩得妙得妙<sup>年正之</sup>化愈  
宗国斯護後躬斯堅

二十八日初多入の事あり  
正安嫡傳細度しり又の事  
越後尋常の事なり  
かゝる事少く人稱の事あり  
此を夫ハまゝとせり  
此の因をことと云ふ物なり  
新なる事と云ふ事相老を  
たゞの事と云ふ事相老を

古國様を信ずる事あり  
予の事あり 年正之  
名ありくとせりハ  
川流ありて  
善き事あり かし  
と云ふ事あり 柳様あり  
柳様ありと云ふ事あり  
身なりと云ふ事あり  
所し給と云ふ事あり  
之に他也 山下と云ふ事あり  
此の事ありと云ふ事あり  
予の事ありと云ふ事あり  
予の事ありと云ふ事あり

當りと云ふ所たりと云ふ程分  
井仰る所の直に三毛を御せ  
内なる金法に在りし  
五と井は力現の中  
川岸を走らば内を求めし  
俗名ふ俗名を日本橋に  
相川一方が筆下を  
此懐の得るふとあれ 正三  
さて世にけ世の中と云ふ  
知人しとありし物文に  
我々山の人か  
とて世に知可人し  
かゝるとし取ると知

あつてくして其の行  
いふふりしと云ふ  
る所なりしと云ふ  
た所と土産と云ふ  
新島事之舟筆一  
土産と云ふ  
平昔の事  
と云ふ  
所地直  
み青  
此  
形

とちんまをりし種子の奇  
いん存りて新し奇めい  
年三  
つーととつらつら  
ちんまのつらつら  
何のくちりけり  
これとまの命を  
いんまのつらつら  
高山主乃懐年  
てつらつら  
結可一首 達  
とちんまのつらつら

春者まをりし種子の奇  
いん存りて新し奇めい  
年三  
つーととつらつら  
ちんまのつらつら  
何のくちりけり  
これとまの命を  
いんまのつらつら  
高山主乃懐年  
てつらつら  
結可一首 達  
とちんまのつらつら

五石を重浪千重成  
 天てとちあめ由久  
 己とここふ春陽をき  
 と我老くとととと  
 奇ととととけはらふは  
は 妻  
 高とふ言やめ名と也  
 とととととまばらま  
 ととととととととと  
 と書 仙堂思ふと和し奇  
 とととととととととと

六千ふふの律りし岸はと  
 今も色酒中らぬととと  
 結長久の波は浪は手  
 ととと 申久ととととと  
 奇ふおととととと  
 由久とととととと  
 けらとととととと  
 長田成るつるふれ日  
 とととととととととと  
 とととととととととと  
 とととととととととと





林多則方觀人斗年也  
生計潤傑自月多矣  
辛未未月不柳好德  
田家亦年也  
三原氏

三十晦日  
隱多可多可  
友仲亦多可  
出の高細  
印古多可  
市多可

神一之  
市多可  
臨何可  
と堂多可  
臨多可  
均多可  
甫能多可  
侍天任人  
耳古曾  
遍武  
喜心  
多可





寛政元年末の 高山正之日記を讀む

伊 東 尾 四 郎

高山の日記は江戸日記、東北日記、京都日記、九州日記と種々残つてゐる。本書は即ち江戸日記の一部で、寛政元年十一月末から十二月晦日までの日記である。此以前の江戸日記は寛政元年十月三日から十一月廿二日までの部があり、以後のは寛政二年五月の部があつて、世に傳つてゐる。

私は一昨年上州に遊んで、高山の遺跡遺墨を探り、昨年は信州に往つて、矢島氏秘藏の書類を拜見し、又中津の築家を訪問し、高山の遺墨は大分見て廻つた。これだけの路筋を踏んでから、本書を讀むと成程と首肯されることが多い。

本書に「前野へ歸りて宿す」といふことが始終見えてゐる。前野老人とあるのは、彼の蘭學者として有名な前野良澤（蘭化）の事で、與美壽とか喜とかあるのも同様である。又達とあるのは、良澤の子良庵の事である。高山と前野とは非常に親しく、寛政元年二年の江戸滞在中は、大抵前野家に宿泊してゐる。本書中前野父子及び珉

子夫人の歌が屢見える。前野が高山に袴を贈つたり、高山が前野に福壽草を土産にしたりした事なども見える。

本書には無いけれども、高山は大槻玄澤や桂川甫周などの蘭學者とも交際があつた。高山は始終前野の家に宿泊してゐた程だから、前野の智識の影響を受けたことも想像される。前野から高山に送つた書翰には、二人の關係を知るべき貴重資料がある。

築氏の事も屢見えてゐる。築も江戸の中津藩邸の士で次正とあるのは即ち其の人である。高山は築氏とも非常に親しかつた。六日の條に「築氏の室人三十五日明日に當れば水仙花を寄せたり」とある。次正の室は寛政元年十一月二日に死亡した。十一月の日記を見ると、高山は其の病中に度々見舞ひ、終夜看病して按摩をしてやつたこともあり、死亡後は葬儀萬端親切に世話し、送葬の状況、路順から、埋葬の事に至るまで、明細に認めてゐる。

高山が交際の範圍の廣かつたことは、本書でも其の一端が窺はれる。何侯の臣某を訪ふといふやうな記事が多く見える。學者方面でも安藝の頼千秋（春水）や、水戸の長久保赤水や、久留米の樺島公禮（石梁）の名が見える。樺島とは最も親しかつたので再三久留米藩邸を訪う

てゐる。二十一日の條に樺島が高山を評して「公は由之勇、曾點之狂あり、今よりは顔子に進み玉へ」と言つたとあるのは面白い。

孝心の發露せる記事が屢見える。十一月末の條に伊賀鎮靈神や鎮得靈神に代參者を立つる記事がある。伊賀鎮靈神は祖父貞正、鎮得靈神は祖母の靈神の事である。祖父は明和三年四月廿二日に歿し、祖母は天明六年八月廿四日に歿した。父母は早く歿し、祖母は長く生存してゐたから、祖母を慕ふ情深く、其の歿するや叔父劍持長藏と共に、三年の喪に服した。

三日 伊賀鎮靈神へ奉る所の御酒を調ふて拜し奉る。

十二日 鎮得靈神明十三日誕辰の故に、御酒代一百銅を寄せ侍りぬ。

十六日 靈神へ御酒奉りて……

十七日 顯祖を拜す。

廿一日 小鯛二頭を連ねたりけるを伊賀鎮靈神へ奉る爲めにす。昆布を

は鎮得靈神へ奉る爲めにす。

廿二日 例の如く顯祖考を拜し奉れり。

廿三日 今夜證て顯祖祖を拜すること例の如し。

廿四日 顯祖祖を拜し奉る事、日に三度。

廿六日 手水して靈神を拜し御酒奉りて、……

一族の事に就きては正業義助の名が見える。正業は叔父

劍持長藏で、其歸郷の際の記事がある。義助は高山の長男。

金銭に關する記事が甚だ多い。大抵借金の事である。

九日 晩に前野へ歸へりて南條一片を返辨せり。

十三日 次正語は、片桐侯より松下平馬を以て二十兩今成り難きの斷り有るのよし。

廿二日 片桐侯の隠居所に入りて、證書を替へ、都合十三兩を借る。今日借る所は八兩也。壹兩をは松下平馬に返辨す。猶三兩を松下等に借らん事を乞ふて、……

廿三日 本山忠次郎所に至る。予が貧困を痛みて二分を寄す。

廿四日 赤水翁に入る。僅に二分を借るのみ。……藍水所へ入りける。

幸に二分を借る事有り。

廿五日 金貳兩を借る。……伊藤良助所へ入り壹分を借る。

廿六日 中鳥家へ入る。……來年子供參るに及ばゞ、二兩を借らん事を乞ふて出で、平七に一片を借て去る。連雀町森重藏に二分を返へす。

尙綱へ二分と一片を返へして皆ナ済む。……上州屋勘右衛門所に寄りて……二百兩を返へし、三兩を借を。

廿八日 片桐侯に入りぬるに、三士共に借さず。

廿九日 伊藤良助所へ寄りし時に、南條二片を返へす。

高山の借金記事は、本書以外の日記中にも見える。隨分遺繰算段をしたものらしい。借りたり返したりしたことが、正直に記されてゐる。傘や下駄を借りて返した記事

もある。

前述記事中十三日、廿二日、廿八日の條に片桐老侯云々の文字が見える。高山は片桐家に屢出入してゐる。片桐家は築次正とも關係がある。片石見守から築又七（次正）に宛てた書が、築家に残つて居るが、それには

御尊之高山勇士の事、世を捨山に入候や、哭々も可惜、残念なる哉、あたら徳行の仁、御引留願入候

とある。片桐家は大和小泉の城主である。

飲酒の事も屢見える。飲酒は前野から慎むやうに忠告されたものらしく、高山から前野良庵宛の書中にも

盃中之事も氣度御教示存出候、是又尊大人様へ克々被仰通可被下候、益々旅行中は、酒も用ひ申候得共、夜中相酔候程は用ひ不申候、御禁戒を相守申候

とある。

この他本書を通覽すると、種々の事が書いてあるのに氣がつく。菅公の文や、孝行數へ歌を寫したり、水心子の門人二三十人の名を書き取つたり、久留米侯の抱力士秋津島や、小野川喜三郎の事を書いたり、永代橋の出刃殺傷事件や、吉原田圃の情死の事まで書いてある。高山は筆まめの方で、日記のみならず、紀行文も種々書いた

ものがある。

久留米は高山終焉の地であるけれども、其の携帶品は當時郷里へ送り還したといふことである。高山の遺物らしいものが久留米地方に無いのは、眞に已むを得ぬ。しかし本書の原本が昔武藏の本庄氏から筑後の人佐田氏（修平號竹水）へ贈られ、それが今倉田氏の篤志によつて寫眞版となり、公にされるのは、何より喜ばしい。これで久留米地方に高山の紀念物として有意義なものが一つ出來た譯である。

### はしがき

一、本篇は、高山伸繩先生の江戸日記殘篇を寫眞版に附するに當りて、原文に難讀の個所が多いので、之を讀み易からしむる爲に、楷書平假名に直して活字版としたものである。

一、變體假名は、活字の都合により多くは普通の平假名に改めた、但し特に萬葉假名を用ひたる和歌等は成るべく漢字を用ふることにした。

一、てにをはの類に、片假名と平假名とを混用せられた所もあるが、それは總て原文のままにした。

一、蠶蝨の部分は、□を用ひ、字體明かならざるものは○を用ひ、推讀し得べきものには、其右側に推定文字を記しておいた。

一、原本には無論句讀點を附して無いが、本書には讀者の便を謀りて、之を施した。

一、本文通讀の際人物及び地名等について氣ついた事は蓋頭に註釋を加へた。

一、原本行草文字の讀解には、十分勘考を費したが、尙誤脱が無いとは言へぬ、是等は切に讀者の示教を仰ぐ次第である。

昭和三年九月主基齋田拔穂式の日

武藤直治識

連字は子  
通良庵と  
野子化先  
生の子な

とぞ。渡部茂雅の歌、

吳竹のかわらぬ色の君か家は豊なる世の雪を積れる

となん。長叔答歌あり。達、茂雅新田へ渡るを送りて

よまれしも有れど、爰に略す。

茂雅の利根川の雪の歌、

遠近の里の家居も目へわかす利根の川瀬にふれるしら

雪

熊谷にて戯れによめる歌、

ますら○も今日は弱りて東路○をふり行袖を哀れ覺ゆ

武士の猛き心も言の葉もよわりは○てたる玉鉾の道

と語りて、今夜達と共に築氏へ入る。二十四日臺へ着

き、二十六日に細谷村へ行き、二十七日出立にて歸

へりたるよし、達語りぬ。國方子共等迄見たるに替る

事なしとぞ。茂雅歌を寄す。爰に載せ待る。

故郷の垣根につもるしら雪はとけ行ことのしらぬる

かな

とぞ。前野へ歸へりて酌ミ語りて、夜半に及んで寝ぬ。

國の事語るにも及はず、安堵あれと云へるに任せて尋

ねもせず。臺に於て、伊賀鎮靈神へ代參は達才子、細

谷村に於て、鎮得靈神へ代拜は義介竹駒これを勤む。

竹駒は義  
介の幼名  
に介は高  
義一の高  
山後生一  
殺先十の  
年米に父  
留て父の

墓に展せ  
り、内侍は山  
伴侯の家に  
臣谷氏の通  
しは、萬子六  
稻千城、父  
谷千城、祖  
爵の祖、父

今日伴兄が語るに、佐藤源六島廻りの節、難風にて土  
佐へ着きける時に、谷丹内對したるよし、筆記二冊成  
りしとぞ。

十二月朔日

壬子快晴。松平備前侯の臣、野村八兵衛及  
び小幡元民來る。茂雅も來て大に酌む。遂に歌なりぬ  
言書 醉のまに〜よめる、

正之

盃のめくるか如にまといしつ語りて過る日こそ惜けれ

同 茂雅

ともかきのかきほに生るくれ竹のみきは盡せぬ千代の  
盃

醉のすさみに歌よ見せる時の歌、 達

盃のめくるかことく友かきは酌つゝ經南年乎毛日乎  
毛

平正之

源茂雅の君のよめる御歌の末の言葉を取りて返し歌の  
心によめる、

千代ふとも志れはせまし○友垣の道した○かへぬ古をこそ

思ふ

○返し 茂雅

とも垣の道したかへぬことの葉にこたふる筆のあとも

はつかし

刀根の川邊に宿りせし曉を、おもひ出てよめる、

茂雅

上津毛のとねのかわ邊のかり枕そのあかつきの月をみ  
しかな

二日

晴る。水仙花を求めて築氏へ寄す。初月忌なれば  
なり。小林勝之助に相識となる。夜前野老人の度々御  
沙汰により老小君へ出られけるによりて、前野へ歸へ  
りて待つ。夜半を過て下る寛恕の命下りたるとして、舉

家よろこびあへり。猶出で、大に語る。深更に及○ンで  
寝ぬ。今日初月忌の故に、築家へ前野婦人柏木氏珉よ

り、過し日○其のおもかけも忘れられて廻る日數にぬる  
袖哉

となんありけるに、築氏の祖母返歌ありけるは、  
志し厚クぞ送る玉なれば先立人も千々にくるらん

と聞し

とぞ。今日、築氏に於て、神谷源内に逢ふ。築氏の惣  
髮の願ひ叶ひたるよし。予築と語て夜に及ぶ。

三日

甲寅土用酉ノ六刻に入る。快晴也。塚本良三、丸山  
徳兵衛來る。出で、市川氏を常足に頼まれて昏姻の事

を告るに逢ふ。共に入湯錢百銅を借る事あり。別れて上州屋勘右衛門所へ入りて、勘右衛門に錢を興へて、伊賀鎮靈神へ奉る所の御酒を調ふて拜し奉る。酌ミ□相識尙綱を訪ひぬ。久右衛門に○○となる。鈴木惣左衛門尋ねて夜に○○入て奥平中邸に歸へる。前野に宿す。

四日 雨降る。築氏に寄りて羽生を問はんとせしが、止まりて行かで、語りて夜に及ぶ。歸りて前野に宿す。

五日 雨降る。築氏より麥八を使としける。至り語りて夜亥の刻に、前野に歸へりて宿す。

六日 丁巳大寒十二月中戌の二刻に入る。曇る。十一月十日甘露降ると聞ゆ。前野老人の語也。先きに其の聞へありけれど、眞偽覺東なく記さず。頃日、次正庭に下りて、檜の葉を取りて見へぬるに、薄きやふに似てなめけるに甘味有り。十月にも降りぬるとて、築の子次行檜の葉を取りて出だす事有り。去年○冬も甘露○降○ける事ありしか、築氏語りし。午ノ刻より晴る。新錢座○○侯の邸布引拙齋所へ至りて、湘山星移集、應永記を返へし、謙倉大雙紙脱漏文正記長祿記室の梅を借る。予館林記一冊を借す事あり。茶漬の後に、出でて關備前侯の邸吉田平左衛門を訪ふ。遂に谷萬六所へ至

るに、他出也、歸へる時に、竹川町伊藤良助所へ寄る間宮周元、加茂宮隆元、川角光隆、筑地門跡寺中、淨泉寺中明、報眞寺圓海等に相識となる。間宮周元は讃州丸龜領下高瀬村周伯なるが子にて、其父孝弟忠信の事跡を集る事を好み、予が四國遊行を待つのみし述ぶ、川角光隆は山口仲之進殿の醫臣にて、歌を好み、芝山持豊卿の父重豊卿の門人なるよし。重豊卿は、二條家にては歌の勸能にてありけるが、有栖川親王の偏執の御心にて○○とならずして終らる。閑院帥ノ宮は、御歌も能クなりて、大に御信仰ありけるとぞ。

桃園院崩御の御時、泉湧寺迄御送葬なし奉りて、重豊卿歌よまれたる。

君ひとり置て山路を歸へるとて人も涙も止らざりけり  
とぞ。北野天神法樂の歌の内に、別戀を持豊卿、  
別れうき今朝の妻戸の出でがてにかこと求て立そ休ら  
ふ

とありける。多クの中にて、

上の御賞美に預りし歌とぞ。光隆語る所也。暮に及びて  
奥平中邸に歸へる。築氏の室人三十五日明日に當れば  
、水仙花を寄せたり。前野に宿す。

七日 雨降る。前野家煤掃□にて、夜酒出つ。坂東忠本傳をよみて、○ノ刻に及ぶ。前野に宿す。

八日 曇る。伴兄所へ行かんとして、遅きか故に止み、

頼千秋、田中新五右衛門、西川利右衛門等を問ふて歸へる。藥と語り、前野に宿す。老人へ歌を寄せ侍る。

君の仰せことをかしくみて、和藥陀の書、言わけし、克ク世に横たるいさをしの大なるをしろし召しにや、御母君より寛なる恵み蒙り給へるをほぎて歌よみて進らせける、

正之

阪寧は大  
飯の齋の  
別義なり

朝に吳に忘れん言を守つゝまめなる道を君照らすなるとぞ。竹山を千五石にて、招かむとしたる諸侯有りとそ。大阪濟○十一月八日身まかる。夜前野にて酒を酌みける。

九日 庚申快晴。藥氏へ寄つて○桐侯へ至る留守にて、

辰已久兵衛に申シ置ク。中津人家皆ナ相拂ふ暇橋懸りて、雲雲院の後なる上り地を山になすの爲メ也。横一町斗リ、長サ三丁斗リ、皆ナ本の通り大川に歸へるとそ。遂に、谷萬六所へ入る、酒出づ。金一兩を借す、義介竹駒が頃日の歌を感じて後醍醐帝の時、八歳宮の君を戀しの御歌同意也。寫し置きける。土佐侯の祖一豊入部

の始め、一領具足共雪溪寺に集り、従服せずありけるを、仁井田といへる所にて、打取りて従へ、今郷士となりて従服す。毎年正月十一日、馬の乗初メ、高知城下に於てあり。皆ナ具足繼にて○立乗廻はすとぞ。けち火とて高知城下遠からぬ海邊○斗の間に出るけち火と呼ばば、忽ち北の高山より飛び來るといふ。其○山國の故か、怪多しとなん。伴兄語る。八町堀越中侯の裏ラあたりに居る平井津賀根○いへるは、堀口貞滿の後にて、予を尋ねんとするのよし。傳馬丁片見小太郎なるは射藝の達人にて、其父ハ六十餘、蝦夷へ夫役たらん事を願ひたるのよし。晩に前野へ歸へりて、南籙一片を返辨せり。夜藥氏より堀井時喜使たり。行至りて語り、歸へりて前野に宿す。後の喪、前の喪に越へたりなど、ある儒生の説を聞ク。人情時勢を知らぬ事と覺へしと伴兄語る。

十日 晴る。伊藤弘所へ寄る狩野○の子榮介守春に相識となる。弘と共に榎坂の上、山口仲之進殿の内、川角光隆所へ入る。予が至るを待ちて、梅花を活け床の飾りをなす。伏見親王の御自ラ製し給ひつる歌袋を懸け置き、高倉殿の書かれし歌を懸け物にす。先づ焼き物

狩野探圓  
名は風齋  
畫家探業  
の養子なり



に濁酒を出だし、清酒吸物肴飯迄出だせり。光隆十八年以前、正月十七日、京都に於て、舞樂拜見の時に逢ひし人也けるを思ひ出づれば、彼も又タ予が事を思ひ出でて扱こそ三年の喪を勤め給ひしとて、大に感心す。酔後、歌を寄す。爰に載せ侍る。

光隆

伊にしへのおしへ賢くもる人のけふのそみますことそ尊き

とぞ。予返歌す。近体カ  
○○の言葉書也とそ。

主の歌の文字の賞せる心をとりにて、御歌の下の言葉をとりて返へし歌の心によめる

正之

今日こゝに〇て。見つれば十〇あまりやとせのむかし逢ひし人かも

となん。佐(伊カ)藤  
〇〇弘詩を作る。

主人

歳晩、陪高山先生、訪川角君、賦〇〇〇  
偶訪道人家。幽篁自不譁。世間催歲月。醉裏見梅花。俱話十年舊。再期二月霞。興情猶未盡。歸路日將斜。

右 藤弘拜

とそ。十八年以前、光隆か名を孫兵衛といひ、共に御

舞樂を拜見せしものは、土佐扶持人山田彦三郎及び石原源之助也とぞ。伏見宮様を邦輔親王と申奉る。薨御の後。九十年斗りになる。始め堀川通一條上ル所に居る鍛冶が家に入らせ給ふ事あり。時に九歳正月元日奇特の事ありて、後御撰びにより、親王〇なり給ふ。御身を寄せ給ひしもの四人召出たされ褒賞有。鍛工も其一人也。歌袋の御歌、

徒に鳴くや蛙の歌袋愚かなるにも思ひ入ればや  
とそ書き給ひける。世に鍛冶家の親王とあた名を奉りけるとぞ。夜に入て、前野へ歸へりて宿す。

十一日 曇る。仲父正穂君蓮嚴院遊雪現政居士、周忌の故に、改代町上州屋平七所へ至りて拜禮す。遂に平七所に宿し侍りぬ。今朝要叔の祖母君の墓前を拂ふ事有と夢見ける。

十二日 晴る。改代町を出で、鈴木惣左衛門所へ寄り尚綱を訪ふ。他出。越後侯の邸岡村〇〇宅に入りて暫ク語り林家常足所へ寄り彌淵を訪ふ。他出。羽生氏を尋ぬるに他出にて逢はず。奥平中邸前野へ歸へりて宿す。今日上州屋勘右衛門所にて、鎮得靈神明十三日誕辰の故に、御酒代一百銅を寄せ侍りぬ。拜す。越前屋

への宿料、八兩二分か六兩一分かあるへしと、上州屋算用せり。今夜築氏にて語る。津輕侯の五代斗りの祖十五歳にして初入部ありし時、臣下皆十迎ひとして出るに、或は禮服或は白衣なるもありて、駕籠の戸押開き大きくならせ給ふなどいひつゝ無骨いふ斗なし。時に候歌よまれしは、

哀れ也吾妻のはての住居とて人の人たる道し知らねは  
となんあつて、其レより學者或は藝者、細工人を召抱へて禮<sup>を</sup>〇知らしめ、器用を成しける故に、今の如く大に開らけたりよぞ。茂雅今ま津輕侯の臣落合新次郎、父の板になしたる菅公の書を見す。奈良の都の寺にありし也とぞ。爰に載す。

聖武天皇奉遵先帝遺詔、日夜紹隆此寺、遍降綸命搜求良工。時有稱沙門道慈者、奏 天皇曰、道慈問道求淫自唐國來聖朝。但有一宿念、欲造大寺、偷圖取西明寺結構體。天皇聞而大悅、以爲我願滿也。天平元年己巳、更勅道慈改造此寺、即以道慈補律師、兼賜食封一百戸、褒賞有員不具記之。二七年間營造既成。 天皇歡悅開大法會、施入三百町水田、得度五百人之沙彌。十七年乙酉、改大官大寺以爲大安寺。詔曰、令天下太

不安樂之義也。同國複有東大西大兩大寺、故俗呼爲南大寺焉。外從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村去七月十七日仰備、遣唐副使從五位上守右少弁兼行、式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣長谷雄傳宣、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、宜須令大安寺司等勘申彼寺建立代々人緣起者、仍令勘出復流記十二卷中、准知弘仁承和八年之宣旨等例、略所注進如右。

寬平七年八月五日。俗別當遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮權夫僧蘊徽。

世人貴菅公久矣。雖民間之兒女子、尙知公之令名、咸莫不稱天滿天神而敬信禮拜者也。然年記遙隔視其書者稀也。於是乎、得其隻字、猶得拱璧。今茲、予偶視大安寺緣起、乃取其十之一、以上梓。蓋欲便衆人知公之書赫而已。寬政元年歲次己酉夏五月。

旭山赤長卿印

右は石摺也。松井田歌人儘田主永重明歌、爰に載せ侍る。

海邊 擣衣

重明

松に吹なみの秋風夜や寒き衣うつ也住吉のさと

菴 菖 蒲

草の庵の軒のあやめはわかねともふけはそ薫る露の朝  
かせ

老 後 述 懐

老となる年をつみては我うへに物をわするゝ草も生け  
り

寄 松 祝

植置て松も昔の友そとや思ひあはせん千代の行末

山 雪

目の前に積るは置てはるゝと詠やらるゝ雪のふしの  
根

残 菊

行 一

いつしかとまかきの秋に初霜のおきなさひかる白菊の  
花

高 敬

雲の浪越て幾日の雨の中に五月も今は末の松山

行一高敬は、久世家の臣也とそ、皆ナ茂雅の見する所  
也。昨日族人大槻甚右衛門、石井林藏より霜月二日の  
日付の書達す。今日見る也。細川家吉田善左衛門は公  
家衆の別れにて、江戸へ下りける所、後に細川侯の客

分にて出ツ、遂に臣となる。角力の司也。今歳谷風小  
野川方に門入したりける。谷風吉田追風に向ふて、日  
の下開山たらん事を乞ひけるに、先ツ力士となり、段  
々次第階級有て日の下開山となる事也。何れの手は知  
りぬるや、又此ノ手は知るやなと、角力の手を尋ぬる  
に、谷風一も知らで閉口す。追風は小兵、谷風は大兵  
なれとも、谷風遙に小さく見へけるとぞ聞へし。小野川  
へは力士の免状ならじと云ひしを、有馬殿殿中に於て  
細川侯へ御頼によりて叶ひけるとぞ。追風は即吉田善  
左衛門也。

記伊は基  
辨父やぶ  
るべしな  
るべしな  
前國にも  
し今にも  
當基に三

十三日 甲子快晴。赤羽橋有馬侯の邸へ至らんとて、先  
づ羽生氏へ寄る。赤羽橋有馬侯の醫臣古賀春庵所へに  
入りて、先月二十五日の禮辭を述ぶ。中山道生對す。  
樺島勇吉所へ入るに、他出にて、其兄小森田勘四郎、  
山本玄達を相手に呼びて、吸物酒肴を出だす。相撲の  
事に及びて、筑後國紀伊屋ぶ二郡は克ク角力士を出だ  
すと語る。宗對馬守殿の領分のよし。昔シ秋津島なる角  
力士、三原郡久良原村より出で、日ノ下開山となる。  
是レは有馬侯の下なるよし。今日角力士共皆ナ慕戀す  
るとなん。失せて三十年斗りになるとぞ。今歳小野川

へ力士免状の出でたる事を尋ねるに、小森田克夕覺へて告げたり。爰に載す。

證 狀

當時久留米御拘

攝州 大坂 住人

小野 川 喜 三 郎

右ハ今度相撲力士

故實門弟相加候

仍而證乃件寛

寛政元己酉年十月

本朝相撲司十九代孫

吉 田 追 風 判

とぞ語りし。細田佐右衛門なる浪人來りて語るに、糺町三軒屋岡野越中守殿家來平野伊左衛門なるは、初メ古今集を讀みて、好んで歌を詠じける所、後中々歌は地下人の讀まるゝものにあらずとて、今は反古に歌の書きてあるを見付る時は、挟み取りて火中に入れて、勿體なしとて、忝敬す。已レも詠する事なく、人にも教へず、毎日古今集を始より終まで誦誦し、昔年紙くず買に貰ひたる古今を錦の袋に入れて、神棚へ安置し

拜禮止む時なし。また五十音といへとも、實は七十音也と、人に傳へて居るのよし、細田氏の仰也。細田氏必らず尋ね給はれと予に云ふ事あり。酌みて晩に及んで、二十一日玄達へ會すべきを約して出ツ。前野に歸へる。夜時喜を以テ迎へける故、築氏へ至る。次正語は片桐侯より松下平馬を以テ、二十兩は成り難きの斷り有るのよし。亥の刻半に及んで前野へ歸りて宿す。

十四日 晴る。前野悦右衛門に相識となる。上方御郡代

石原清左衛門殿内也。石原殿

禁裏新調御用承はる事昔よりとぞ。前野氏始メ奥州岩城女ノ濱御代官蔭山外記殿に事へたるのよし。女ノ濱ノ邊に四倉村といふ所有り。鈴木甚左衛門なる分限者有り十五年斗以前金子千兩を上ぐ、内百兩は貧困のもの共小兒養育の爲に出だす、残り九百兩をば或は一割五分或は一割にて借し付々、其利足を以テ翌年よりは小兒養育金とす。荒地開發の爲メには一割にて借し、其餘は一割五分の利とす。久シからずして、田地開らけ兒を殺す事止みぬるよし。築氏へ寄るに出來島村利助居る。江徳より次正へのじのを届けたるのよし。利助宿は小鮎町西ノ宮半兵衛所とぞ。深井半左衛門と共に出

で、門前にて□別る。予は塚本良三所へ寄る。神田上州屋勘右衛門所へ至りて手水し神拜す。筋違門を出で、山下を過ぎ大寛所へ至る、他出。大○寺より此方なる下谷龍泉寺町松壽寺隣戸田采女正殿下邸の前二ツ木猪飼二子を尋ヌ二子共に他出。茶漬を食し、中西猪太郎前を経て、神田上州屋勘右衛門所に酌みて宿す。

**十五日** 丙寅快晴。手水し靈神へ御酒奉り酌みて上州屋を立ち、日本橋を渡る。青物丁新道小松原剛治へ寄りて袴を改めて出ツ。牧野佐渡侯の邸野田和三郎に逢ふて古今傳授の○の禮謝を述ぶ。長井傳五左衛門なる士に相識となる。甲ヒ渡しを渡りて新大橋を越へ仙臺川岸の後なる片桐侯の隱宅へ入る。先づ松下平馬辰巳久兵衛等に恩借金の事をいひ、久ふして老侯に逢ふて語る。二十二日參るべしと約して立ツ。肥前唐津の産するめ、播州三日月の産なる鮎を老侯の寄せられける。出て、谷魚川町伊南八重平宅に入る。時に歌の會にて集へり。土手四番丁長壺市郎左衛門殿内早見三太夫、旗野元泉春洞、海老原秀之介、都郷、小林勇助也早見の外は今日始めて相識る。八重平兼題御歌年内立春を麻上下にて勸請殿に向ふて拍手を打て變み上く、集會

の歌のみを爰に載す。

年内 立春

八重平

名残思ふ年の内より年くれていと早はるに逢にけるかな

同

春洞

冬なから春の光の玉くしけ年に二たひかすむ山の端

同

都郷

年の内にまた立歸へる此春と知らるゝものは鶯の聲斯て天高暮山遠といへる題にて、人々よめる。

八重平

あすも又晴やかなるか天高く入日春けき西の山端

春洞

夕暮にあふけは高さ久かたの天よりつゝく遠方の山とそ。人々君も一首をと進めけれど、昨日の夜にこりて、急ぎ出で、新大橋を渡る。

正之

富士の根見へてよし。彼の題を思ひ出で、よめる。晴れ渡る空につゝきてあかねさす日も入相に見ゆる富士の根

水心子は

後を顧るに、月も出て給ふて面白し。水心子へ寄りて

夜に入り奥平中邸に歸へる。昨日奥村幸太郎來りしよし。

築氏の歌に見さくれば富士の高根に日かくりてひんかしの空に月にすみのぼるとありけるよし、達が語りし。

今日の暮ほとに、新大橋を渡りける氣色にされにたる歌とぞ覺へ侍る。酒酌て前野に宿す。

田安宗武卿の歌とて、

ふる雪に競鳴する佐千人の熊の行ムカバキ○眞白となりぬ

寒 蘆

難波江の堀江のあしの霜にかれて汀あらはに波のよる

見ゆ

とぞ、達が語りし。

**十六日** 快晴。前野老人袴を寄せたり。予深く受納し、

着して、神田に至り、上州屋勘右衛門所手水靈神へ御

酒奉りて拜し戴きて歸へる。焼酎酒を前野老人へ寄せ

侍る。達痛所にて今夜は早く寝ける。

**十七日** 晴る。謹みて顯妣を拜す。中飯後、火酒を酌み

て、稻荷橋阿侯の邸に至り、本山忠次郎を訪ふ。茶菓

飯を出たす。晩に前野に歸へりて宿す。己待にて飲娯

す。

本山氏、何成共申させ玉へ、御相談に預るべし、正秀にも談し玉へといひし。

**十八日** 晴る。本多中務大輔殿内小林惣太夫、阿部侯新

島五兵衛書を以テ相識となり、山岡佐一右衛門世字抹消カ○倅勝

藏が事に付きて養子入の事を謀る。恩田半五左衛門家四十餘歳

格食碌元ノママのを委ク御尋元ノママに乞ふのよし。予諾す。

茂雅時喜と共に出で、下谷中西猪太郎所へ入る。吸物

酒出ツ。山下二〇〇之助カ今は安左衛門と改む。兄も同席す

美濃國岩村松平能登守殿家士山梨兵右衛門に相識とな

る。出で、茂雅等と別れ、予は山下タキを過ぐ、遂に原六

軒丁なる原田大寛所へ入る。森傳右衛門とて書法額傳

等の濟みたる人有りて、今歳其門人等皆ナ越中侯へ書

出になりたるよし。佐竹壹岐侯の臣大西隼太に相識と

なる。共に出で、石川藤助所へ入る。淺草織田出雲

侯の屋敷の邊也。他出にて、門人石川壽三に申置ク。

新堀ばた不老山壽松院に寄りて、元祖堂に居て、喪禮を

勤むる富東作、名は龍、字は雲卿を尋ぬ。兼て予が名

を知りて頓首して落涙す。折々尋ぬる人は、奥平家若

林半平、井ノ上河内侯の臣茂呂彌次郎字は定直のみ。

其餘羽生朝辰香取彌淵來るのみと語れり。父の頭巾を

懐中し、佛師に學びて父の像を作らんと語り、且ツ父存命の節申すは、草臥もせね共導引を命し、扱々至誠天に通ずると説ひし事、儒業を立るには、俗氣を去るべしと示メしつる事、父は井ノ上嘉膳、關榮一、金峨などに付いて學びたりなど語れり。墓へ參るに、先づ東作頓首父に告るは、高山彦九郎正之殿、拙者喪居を弔はるゝといひて、大に哭す。予も哭す。其後予も亦た拜禮す。石碑も立つ。淨雲院騰譽寧父信士と號す。去年十月二十一日歿す。年五十歳とぞ。寺を出で、淺草の市を経るに、人例年より鮮ナシ。淺草御門を入り、濱丁を過ぎりて、正秀水心子を尋ぬ。他出也。夜に入つて奥平中郎前野氏へ歸て宿す。樂氏も來り居て語る

**十九日** 風吹く本多中務太輔殿内小林惣太夫所へ行かんとして、芝新橋惣十郎丁を過るとて、富壽元所へ寄る。東作兄也。昨夜東作參りて公の弔慰し玉ひし事を告げぬと語りて、母及び弟妹迄呼ひ出だして子に見す。壽元二十七歳、東作二十二歳、政次郎十七歳、かね女十三歳、壽三十歳、善女よし四歳とぞ。かねか書及び玩物等を予が女子へとて寄す。皆ナかね女か作りたる物也。出で、すき屋橋御門を入りひゞや御門の此方なる本多侯の上邸

にて、小林惣太夫所へ入る。山岡勝藏に申置く。伏見町間宮周元所へ寄りて、竹川町伊藤良助方へ入りて、酌みて暮に及び、前野に歸りて宿す。

**二十日** 晴る。他出せんとする所へ長叔來らる。金子才覺の爲めに出府のよし語らる。長叔と樂氏へ入りて、又前野に歸り、酒出づ。政徳及び石井林藏、大槻甚右衛門兩人への返書を認む。夜に及んで、長叔は銀座町へとて立ち玉ふ。辰巳久兵衛、松下平馬書狀二十二日に參るへしと返書す。塚本良三來る。長叔十七日夜、吹上に及びて、日暮れけるに、茶店に宿せらる。夏、予が出府の時、休ひし所也とぞ。鞠つき謠を聞き玉ふて何人の教へたるそと尋ねられけるに、學者の教へたる也と答へしと語らる。爰に載す。

一ツとや人に生れし印には親に孝行せにやならぬ〜  
二ツとや二人の親にあつかりしからたを大事にせにやならぬ〜。三ツとや三年か間の母親のくるしみ給ふを思ひしれ〜。四ツとやよく〜思へは親程に大事のものは外にない〜。五ツとや何國の浦ても孝行の人には御恵み有そかし〜。六ツとやむかし〜の教には孝行斗は徳の本〜。七ツとや何事よくても二親

政徳は高山先生宅の留守者なり

に不孝なものはない。八ツとや屋つはり親を  
は我身そと思へは大事になるものぞ。九ツとや心  
をよくく付て見よひとり大きくなるものか。十とやとよから此歌覺へたら世話をはやかせず親達に  
く。

とぞ。又タ上尾宿京屋が語りしとて越中公八人の學者  
をいだし玉ひて、民間に道を説ク事をす。上尾近邊に  
て在中に道を説し事ありしとぞ。長叔歸國の節は、上  
尾講堂立寄らるゝの約束し玉ひしよし聞へし。義介が  
初雪の歌に感心の餘り、一夜睡らざるを語りて、長叔  
明日出立に詫して、麻上下を送らん事を老人へ語る。  
伴兄が意もありて也。

彌淵は香  
取高は  
て生親  
なり友

二十一日 壬申。節分也。晴る。早朝に焼酎を飲て出  
で彌淵所へ寄り金百疋を寄す、貳朱は前野老人の送る  
所也。今朝長叔國へ立たるゝ語り、銀座町へ遣はす  
予は白木屋へ至り、遂に駿河町越後屋方に於て義介に  
送る爲めに麻上下を仕立ける髪をおさめ、入湯し、巳  
ノ刻に及んで、麻上下なる。長叔上州屋勘右衛門に待  
ち玉ふ。日本橋にて調ひたる小鯛二頭を連ねたりける  
を、伊賀鎮靈神へ奉る爲めにす。昆布をば鎮得靈神へ

奉る爲めにせり。別に小鯛二頭をは隠宅正寝へ義助奉  
る爲めにす、かち栗かやを隠宅へ、別にかち栗を長叔  
の土産にとて呈す。皆ナはりふんこへ入れて長叔に詫  
し進らせける。家姑へも文を寄せ參らす。茂八從者た  
り。今朝人々長叔へ旅行を急き玉へと云ひけるにより  
て、歌よみ玉ふ。

皆人のいそく心に引かへてくれ行年をおしむ斗そ  
とぞ。昌平橋を渡り本郷を経て、追分に於て酌みて別  
れ進らす。時に歌をと乞はれけるによりて、予も讀  
み侍る。

正之  
今日こそは春立ぬれば玉銚の道行人もの<sup>ケラ脱スルカ</sup>とからまし  
とぞ。行て別れて、歸へらんとしけるに、申残しつる  
事の有りて、巢鴨に及ぶまで語りて別れ參らせける。  
歸へる時に、本郷に於て新島五兵衛に逢ふ。神田上州  
屋勘右衛門所に於て、手水し、謹みて靈神を拜し奉る  
三十二銅を御酒代として、晩に御酒奉る事を勘右衛門  
に詫す。長叔今度出立旅中の歌、爰に載す。

言書  
旅の宿りにて菘を聞て  
正業  
霜かれの草の枕にきりぎりすなく淋しさに夢も結はす  
刀禰川を渡りて



朝またき刀禰の河原の風寒み身にしむ斗千鳥鳴なり  
とぞ。勘右衛門所にて酒出づ。遂に赤羽有馬侯の邸  
に至り、桃島勇吉所へ入る。山本玄達より魚を寄せて  
夜に入る迄酌みぬ。公禮云へるは、公は由之勇會點之  
狂あり、今よりは、顔子に進み玉へ、拙文進らすると  
て一文を寄す。序也。爰に略す。夜芝神明を過る時に  
福壽草を買ふて、前野老人へみやげとす。老人歌を寄  
す。

與美壽

清之登波南倍天裳知良舞毛路古志濃鳥能影會布山の井  
農水

とぞ。來年の惠方は申酉の間あたりて、

帝都を仰ぎ奉ると思ひて、予も歌よみける。爰に載す

正之

皇の高き恵みを吾妻より蝦夷が千鳥も仰ぐなりけり  
とぞ。達の歌、爰に載す。

言書

追儼の夜よめる。

達

春立ときほふ荒男が霞なすあららくに鬼やらふなる  
とぞ。焼酎を飲みて悦び語りて、夜も深けぬる、惠方  
を拜し奉る。毎月の例の如く顯考を拜す。

### 二十二日

癸酉。立春。正月節。今曉子の八刻に入り、  
晴れて風吹く。今朝の夢に、公邊に出でたる中老人を  
家兄杯と進めて出奔せしむる事ありける。其後に、予  
高き木に上りながら恐れ多ツくも、

天孫降臨の事を語る時に、妾も追ふて上り來ると見て  
覺めたり。例の如く顯祖考を拜し奉れり。深川に至り  
片桐侯の隠居所に入りて、證書を替へ、都合十三兩を  
借る。今日借る所は八兩也壹兩をは松下平馬に返金す、  
猶三兩を松下等に借らん事を乞ふて出で、會輔堂へ寄  
る。彦次郎在宿にて語る。兩國橋の新地を御手傳にて  
取り破る時に、人足今日は入らぬとて歸へされんとす  
るに、人足共惡口しけるは、御救普請と思ひて參るに  
人殺し普請也なといひて狼籍し、公儀役人衆へ疵付け  
打合ひ、七人捕へられ、入牢すと聞へて、會輔堂を出  
て、大橋を渡り秋元侯の邸にて、正秀を尋ぬ、遂に水  
心子に宿す。大淵侯の臣戸田勘介、研師忠兵衛、西尾  
隱岐守殿鍛冶中塚初藏三秀、土佐侯の鍛冶木村久太郎  
國道、山形結城正武、弟清七武秀等と語る。頃日、永  
代橋の邊にて手ば包丁にて親の仇を兄弟にて報ひたる  
事ありとぞ。また吉原田面にて、相對死有り。先づ女

を差殺して柄を土上になし、後口より抱き付ひて貫かれて死したりとぞ。夜正秀酒肴を出だして大に酔に及へり。

**二十三日** 晴る。正秀を出で、稻荷橋阿波侯の邸に入る。集堂弓五郎に逢ふて、本山忠次郎所に至る。予が貧困を痛みて二分を寄す。下谷松永町佐々木養元、阿侯の臣前川萬吉、飯田友太夫等に相識となる。本山氏は、信州本山より出で、立花道説に事へ、朝鮮征伐にも渡り、立花より感状を得て、今に傳へて有りとぞ。本田いへるに、此ノ春き置く餅にても御用に立てはや參らすといふにより、志を受るとて、十三を得て出づ。酒を乞ふて、大いに酔ひける。前野へ歸へりて、醒めて後、松原右仲を弔す。當月八日、其父歿せり。木村力藏に相識となる。出で、入湯し、前野氏に歸へりて宿す。今夜謹て顯祖妣を拜する事例のごとし。

**二十四日** 晴れて風吹く。顯祖妣を拜し奉る事、日に三度。築氏の祖父の妹、京極侯の家士に嫁したる人歿し築氏世の輕薄を歎息する事有り。鍛冶橋を入り、竹橋田安を経て、萩原守道所へ寄りて、水戸公の邸、赤水翁へ入る。僅に二分を借るのみ。奥の宮城關伽井山龍

燈、海上より流れにさかのほり、龍燈杉に上りて、林中に没する事毎夜、是を虚空藏堂前燕石にて見たる事赤水翁語れり。奇也。出で、藍水所へ入りける。幸に二分を借る事有り。上州屋勘右衛門所へ寄りて、酉ノ半ハに奥平中邸前野氏へ歸りて宿す。

**二十五日** 晴る。前野老人福壽草の歌、爰に載す。

歌

興美壽

福壽とふ名を負ふ草の年の内にたつ春の日に花咲にけり

となん。金二兩を借る。出で、羽生朝辰へ寄りて、昨日、長久保津島へ松原が喪を知らせたる事を語り、出で、竹川町伊藤良助所へ入り、壹分を借る。榎坂を経る時に、山口侯の邸、川角光隆所へ入る。濁酒を出だせり。歳暮の歌とて見す。

題 歳暮

光 隆

おしめともまた一年のくるゝそといく萬代を數え初けん  
治りて戸ほいぬ御代や諸人のすなをにとしのくるゝゆたけさ

とぞ。遂に赤坂田町壹丁目越前屋與兵衛所へ入りて宿

す。三升樽に金百疋を添へ、其子彌吉へは、折手本を  
與へ侍る。吸物、酒出づ。章部七之助にも、折手本を  
與へたり。服部善藏所へ寄りし時に、壹分を借る事あ  
り。また鈴木作右衛門唐渡りの銀鼠裘を見す。足立郡  
大門宿彦太郎。白旗村義藤太、辻村折吉と同宿す。昨  
日、尙綱所へ寄るに、五年以前に、甘露降るとて、城  
中の石と檜の葉を見する事有り。深更に雨降る。

**二十六日** 曇りて雨降る事有り。赤坂を出て頼千秋へ寄  
り、萩原守道に逢ふて、中島家へ入る。隠居の妾に就  
て、來年子供參るに及ばし、二兩を借らん事を乞ふて  
出で、平七に一片を借て去る。連雀町森重藏に二分を  
返へす。尙綱へ二分と一片を返へして、皆十濟む。雨  
益々降る。傘と下駄を借りて神田鍛冶町上州屋勘右衛  
門所に寄りて、手水して靈神を拜し、御酒奉りて二百  
銅を返へし、三兩を借す。夜に入て、合引橋を渡る。  
小笠原殿臣坂口彌右衛門が灯燈によりて、奥平中邸に  
歸へる。藥氏へ花を寄す。前野へ入りて宿す。語りて  
歌になる。爰に載す。

首書

しはすの廿まり二日、春立るその廿まり六日の夕、雨

のふりけるによめる。

意

のとかにも暮行年とおもふ哉としのこなたの春雨のお  
と

おなし時

正之

春雨のおとも静にふくる夜をゆたけく思ふ年のくれかな

同

達

投矢なすくれ往年に梓弓おしてはる雨またきふるなり

同

珉子

ゆたかにも降る春雨に打つとひなをもにきほふ年の暮  
かな

とそ。欽娛して焼酎を酌む事有り。

**二十七日** 晴る。水心子にて、研師忠兵衛が語りし、永  
代橋にて手齒にて殺したりと聞けるは、死する迄も無  
く、又親の仇打にはあらで、遺恨にての事にて、公邊  
事になりしとぞ。前野にて酌み、次正と出で、筑地  
萬年橋に及び、水鳥を見て歌を讀ばやと言ふ、言下に

次正

打よする波のうねく水鳥のかつくまにく年の暮ぬ  
る

となん。予も又よめり。

波のよるひるともわかす水鳥の水を宿りと思ひけらし  
も

とぞ。尾張丁に於て別れて、本町丸屋に寄りて、二百  
銅を返へす。遂に上州屋勘右衛門所に入りて、破傘下  
駄を返へし、大寛へと出でけるが、早や七つ半バを過  
ぐる頃故に、轉ンじて、濱丁山伏井戸服部道立方へ寄  
り金丹の代、南鏡二片を道立母へ渡し、出で、へつ  
つい川岸池田屋に於て酒壺升を調へ、干菓子を買ふて  
水心子へ入りて宿す。水野家の家來鈴木幸治なるに相  
識となる。水心子門下凡ソ三十人、予聞く、爰に載す。  
仙臺の住本郷源之助國包、今は亡し。仙臺の住安部幸  
七郎包幸、同ク榮吉包典、長餘長之助、以上皆ナ仙臺  
の人也。會津の住古川大八秀國は姓を角氏と改む。羽  
州米澤の住古山長藏元利、永居の住加藤助四郎正通、  
羽州山形住結城清七武秀、同清松正武、土佐木村久太  
郎國道、與州今張の住斧友治國正、阿州石川小平正守、  
其子分彌正直、近藤左一郎由武、越後幕下の土白沼平  
馬、津山住川村藤吉兼先、遠州横須賀中塚初藏三秀、  
上州高崎の住堤長五郎正美、信州松本の住小寺六郎大

夫正君、武州神田の住保則子樋口由藏正則、武州八王  
子宮川官治吉國、羽州谷澤の住谷澤藤兵衛照道、其外  
御旗本には、徳永小膳昌常、蜷川藤五郎末廣、内藤新十  
郎榮進、ヨシユキ彦坂三太夫定豎等也。肥後の國に松村英記昌  
直有り。先づ是等也と、正秀語りぬ。正秀、三秀、國  
道、武秀等と酌で大いに酔ふ。予が作る所の銘を書し  
て、正秀に渡す。拜して受く。爰に載す。

平正之

因恩得妙。得妙作劍。家國斯護。侯躬斯堅。

二十八日 微雨す。正秀相州正宗嫡傳綱廣へ門入のよし  
越後輝虎の歌、山風をなにいとふらん梅の花ちる時に  
こそ香はまさりけりとぞ。國道と共に出で、別れ新大  
橋を渡り、片桐老候へ入りぬるに、三士共に借さず。

兩國橋を渡る時歳暮の歌よめる、 平正之

とやかくとせんすへなみのすみた川流れて早く暮るゝ  
としかも

となんよみし。柳橋に於て、梅櫻松三女を産する若竹  
屋へ寄りて、下谷原六軒町大寛所へ、飴をみやげとし  
て寄る。主シ他出、山下を経て、通油町<sup>ツツ</sup>蔦屋重三郎所  
にて、行成本三冊を買ふて、入湯し、本町にて、井澤

三郎右衛門向ふ先きに、築迄尋ねたりとぞ。栴町井伊侯の裏三宅能登守殿内なる金澤右角所と井澤入魂のよし。鎌倉川岸にて、火酒を求めて、酒店に飲みて、日本橋を渡り、松川一方が筆を買ふて、述懐の餘りによめる、

正之

さてもく此世の中を如何にせむ知人もなき我身也けり  
我は山に入らんとのみぞ覺ほゆるとても知る可き人し無ければ  
今日迄も恥とも知らてなからへてこの行末をいかにすくさん

夜に入て、前野氏へ歸へる。火酒を土産とす。清水萬吉へ、行成本三冊、筆一對を添へて土産とす。築氏へ至りて、干菓子に筆二對を土産とす。酌みて前野に宿す。前野真人の室、柏木氏珉の歌、こゝに載せ侍る。いつはあれとさちたふ春にあふ事は君の恵みそあやかにかしこき

平正之

となん有りし珉子の歌を見侍りて冠り歌の心によめると  
いつしかとさちはふ年に大君の君の恵みをあふくなりけり  
これは京都造營の後上京の事を語りてよめるの也。

言書

高山主の懐乎述流てふ詞乎見且よ見且贈歌一首。

達

美雪不流冬爾毛春者立毛乃乎伊多久奈和比曾末須良雄丹志且

言書

達の贈れる歌に和且

平正之

美雪ふる冬にはあれと寒からぬ酒のふて今日春を迎ふる  
高山主の和へ歌乎す且又贈る歌、  
五百重浪千重波たてど大海の由久良々々に春歸なりとぞ。老人を進めて歌を乞ひけるに言下に

達

言書

翁さひ言やめ居れとみな人のうたげる末にそへてうた

源憲

言書

仙窟にて和し歌よみて參らせける

正之

言書

宇多以津々舞津々今夜酒農婦且年乃緒長久舞津謠波牟

正之

由久良々々々乃歌爾和且

由久良々々々春立賀惠類夕部仁者長閑成留夢仁日茂多  
氣爾氣里

とぞ。欽娛して酔に及べり。今朝、正秀所にて、寒暖  
圭、一に寒熱<sup>熱カ</sup>升降なるものを見る。

**二十九日** 雨降る。火酒を酌て出で、羽生氏へ寄る。松  
原の故に、赤水へ書を添へ侍る。則羽生氏持參、羽生  
と共に塚本家へ入る。語りて樓に登る。塚本良三義正  
歳暮の歌、爰に載す。

をしむへき月日も雪とつもるなり學ひのまことに年は暮  
けり  
義 正

とぞ。子路負米の書を見る。  
輕風枝不定。由也獨傷心。負米豈愁重。唯愁歲月侵。

股野充美

とぞ有りける。朝辰と別れ、服部旗峰所へ至り、二分  
を返へし、酒出で、夜に及ひて、林家<sup>中島氏</sup>へ至り、  
酒魚代二片を寄せて、盃出ツ。市川氏もてなす。井上  
○寄せたる詩に、挑琴心といへる所に至りて、好る事有  
り、折を得て、御目に懸るべしと、祭主より申越すと、  
左仲述べぬ。大に酔ふ。根本勇助所へ見舞ふ。左仲迎  
ひとして來れり。遂に左仲所に宿す。左仲妻は本多伯

股野嘉善  
名は充美  
龍野藩の  
儒者なり

者守殿臣鈴木主税妹なりとぞ。今日塚本良三が歌に付  
て、予もよめり。爰に載す。  
正 之

春よりも夏をむかへて秋冬と學ひもやらて年暮れぬ  
る

とぞ。朝辰よめるは、  
雪とのみつもることしも暮にけりあらたに積れ初春の  
ゆき

となん聞きて、良三所を出で、竹川町伊藤良助所へ  
寄りし時に、南簾二片を返へす。良助詩を書して寄す  
爰に載せ侍る。

歳晩、陪高山先生、訪川角光隆宅。

苔逕通城市。牆東絶世塵。池魚躍出水。林鳥馴窺人。  
斗米安生計。濁醪自不貧。重來門外柳。好認陶家春。

藤弘拜

とぞ。

**三十日** 曇りて雪少シ降る事有り。風吹ひて晴る。左  
仲所にて、朝食、酒、吸物出ツ。尙綱所へ寄る。上州  
屋勘右衛門所へ入りて、手水し、御酒をは勘右衛門備  
へ奉り、拜して歳暮を申す。御酒戴き酌みて出で、駿  
河町越後屋にて帯を買ふ。小松原が病を問ふ。築氏へ

寄るに酒出づ。前野氏歸へりて帯を縫ふ事を詫す。前野老人歌を寄す。

甫能々々登赤城爾傍天住人者赤坂耳古曾春遠迎遍武

惠拜具

とぞ、酒を酌みて夜に入る。予か爲メに、重ね餅を祝ふ事あり。酉の半バに、奥平中郎を出で、京橋日本橋を経て、神田に於て、上州屋勘右衛門に逢ふて、水道橋を渡り、水戸侯の前を経て、改代町平七所へ寄る。赤城の坂を上り、神樂坂を下り、牛込御門を入り糀町より赤坂御門を出で、亥の刻半ハに、赤坂田町壹丁目越前屋與兵衛所に着て宿す。大阪當月廿四日。五日兩日大火とぞ。堀田豊前守殿早飛脚到來のよし、改代町平七語りし。

昭和三年十二月二十五日 印刷

昭和三年十二月三十一日 發行

【非賣品】

久留米市篠山町

編輯兼 出版人 筑後史談會

右代表者 黒岩萬次郎

印刷人 福岡市橋口町四三 藤次郎

印刷所 福岡市橋口町四三 秀巧社印刷所

電話一八九三番

321

72



終

